入選

冬に届いた人の温もり

三重県　朝陽中学校
3年　今西源哉

学校帰り。いつも通り僕は、自転車の後ろにカバンを紐でくくりつけて帰る。日はかなり沈んでいて、風の強い冬の日だった。毎日通る道のりは、うんざりするほど長い。風が顔に吹きつけて冷たさが全身に染み込み、耳元では風の音がゴーゴーと鳴っていた。こんな寒い日の下校は、身体が凍る。僕は乾燥した指で、必死にハンドルを握って自転車をこいだ。

家まであともう少しのところで、うしろから「カバン落としとるよ。」という声が聞こえた。驚いて振り返ってみると、１台の車が僕の横を走った。車をよくみていると、女性が運転席の窓から地面にあるカバンを指差していた。どうやら、僕のカバンが自転車から落ちていたことを教えてくれたのだ。

自転車を急いで停め、後ろをみるとたしかに僕のカバンがそこにあった。寒さと風の音に気を取られていたのか、カバンが落ちたことにまったく気づかなかった。僕にとって、カバンを落とすことはよくあることで、そこまで、驚くほどのことではなかった。でも、それを親切心で伝えてもらったことは一度もなかった。そのせいか、僕は慣れない親切に驚きを隠せず、その場で少し固まっていた。

車の女性は、僕がカバンを落としたことに気づいた様子を確認すると、何事もなかったかのようにその場を去っていった。僕は慌てて少しおじぎをしたが、十分にその場でお礼を言えなかったことを後悔した。声をかけてくれたことへの感謝の気持ちを、うまく伝えることができなかったのは、寒さで心が急いでいたからなのかもしれない。

家に向かう道中、あの女性が声をかけてくれたことが、どれほどありがたかったかを考えていた。ちょっとしたかかわりの中でも、こんな風に親切にしてくれる人がいることに気づかされ、人の誠実さを強く感じた。これまで、周りの人たちは自分に無関心だと思っていたけれど、それは違ったのだと実感した。外は寒かったけれど、僕の心はとても温かかった。

このできごとを通じて、僕も周りの人のために何かできる人間になりたいと思った。これまでの僕は、自分のことばかり考えていたけれど、相手のことを考えて行動することが大切だと気づいた。

これからは相手の気持ちを考えて、人がどんな行動をしているのかを見てみようと思う。何を考えて誰のために動くのかを。きっと、その行いは、さまざまな人を幸せな気持ちにしてくれるのだろう。人の行動の中には、気づかないだけで自分のためにしてくれることがあるのかもしれない。

これから、辛いことや苦しいことをたくさん乗り越えなければいけないときが来ると思う。そのときは、このことを思い出して、物事を前向きにとらえて生きていきたい。